

母を奉じて嵐山に遊ぶ（頼山陽）

不到嵐山已五年 萬株花木倍鮮妍
最忻阿母同衾枕 連夜香雲暖處眠

嵐山に 到らざること 己に 五年

解説 母、静子を案内して嵐山を訪れ、夕方、三軒屋の雪亭に宿をとりその感懐を詠った詩。

万株の 花木 倍 鮮妍

語釈 ※嵐山Ⅱ京都市西部にある山。山麓は多数の寺社が立地する観光名所でもある。※鮮妍Ⅱ鮮やかで美しい。※忻Ⅱ喜ぶこと。※阿母Ⅱ母を親しんで呼ぶことば。※衾枕Ⅱ夜具の意。※香雲Ⅱ香りのよい雲。満開の桜の花のむらがりをいう。

最も 忻ぶ 阿母と 衾枕を 同にし

連夜 香雲 暖かき 処に 眠る

通釈 嵐山を五年もの間、訪れていなかったが、いま来てみると、万株もの桜の木が花をつけて、益々あでやかで美しい。何よりも嬉しいことは、毎晩、母と枕を並べ、この桜の花の香しい雲の中に包まれて眠ることが出来ることである。